ているのか、めったに立ち止まって考えようとしない。

実際には、書かれていることをすべて信じようと歴史書に向かう読者などいない。読者は自分の予想や信条、目的を歴史に持ち込む、というポストモダニストの主張は正しい。しかし重要なことは、著者の意図が完全に読者の読み方を形作るのではないのと同様に、読者が読み方を完全に支配することはない、ということである。読む行為は読者と作者の相互作用であって、どちらか一方が常に、あるいは必然的に支配するということはない。いわんや歴史家が自分たちのいうことすべてが絶対的な真実であるかのように書くことはまずない。それどころか、歴史家が慣習的に使用する言語は、歴史家の記述につきまとう確実性や蓋然性の多様なレベルを細別することに常に気を配ってきた。「おそらく」とか「たぶん」という言葉が歴史著作のなかでかなり頻繁に使われるというだけではない。実際、慎重な歴史家は当面の議論の相対的な強み、あるいは弱点を示すために、またどれだけ試論的な議論にすぎないのか、そうではないのかを示すために、非常に多彩な文体上の工夫を凝らす。A・J・P・テイラーのような歴史家が、彼が好んで称した「速断」をおこない、複雑な歴史の諸問題について独断的な主張をするような例外もある。しかし、これは読者にその主題について考えるよう刺激しているのであって、自分が絶対的真実を語っているのだと読者に無理強いしているのではない。

必要ならば、著者の先入観や目的を表面に出すことによって、著書を自分の意図とは反対の立場から読んでもらうための知識を読者に提供するよう努めるのが、歴史家の習慣であった。また、学部生や院生を教える際、大学の歴史家の主要な目的は、学生に自分たちが読んだ本や論文――その歴史家自身のものも含む――に対して批判的、探求的な態度をとらせることである（そうしなければ、歴史家にとって教育にどんな価値があるのだろうか？　また多くの歴史家が、自著の謝辞で自分たちの議論の多くを再考したり再構成することを余儀なくさせた学生の重要な貢献に感謝の意を記したりするだろうか？）。ポストモダニストの著述家の一人、ビヴァリー・サウスゲートは、過去の真実を追究する歴史学の「伝統的な」モデルといえば、「歴史を学ぶ学生に既存のドグマを疑わせるのではなく、それにしたがうことを学ばさせること」を意味する、と主張する。現実の状況からこれほどかけ離れたことはないであろう。彼の勤務先、ハーフォードシャ大学史学部の同僚たちは、この描写が自分たちの教授方法だ、と認めるのであろうか。そうでないことを願う。[7]

歴史を教授する際と同様に、歴史を叙述する際にも、解釈とは仮説的で不確実なものであり、その解釈は論証する証拠として使用された原史料に照らして絶えず検証される必要がある、と悟らせることを歴史家は忘れない。何が起こったかということと、それをいかに知るにいたったのか、が混同されてはならないのはこのためである。パトリック・ジョイスは次のように主張するかもしれない。「過去の出来事、構造、過程は、文書化された叙述、概念的・政治的に書き換えられた文書、そうした文書によって構築した歴史の言説と区別することはできな

い」。[8] しかし、これはあきらかに正しくない。言説が過去そのものを構築するのではない。せいぜいいえることは、言説は過去を描き出そうとする試みを構築するということであろう。ジョイス自身は、『パスト・アンド・プレゼント』誌上でのローレンス・ストーンとの論争と同時期に出版した著書のなかで、自分の理論的主張を混乱させてしまっている。ジョイスはこの著作のなかで「社会秩序の記号学」を唱える一方で、「社会秩序の概念は貧困や不安や肉体労働の経験に秩序と品位をもたらそうとする試みと結び付いていた」とも記している。[9] ジョイスはここで「経験」概念を解釈し、貧困が実質をもった現実であることは自明のことだと暗示している。その著書のなかで表明した自己の信念を強調しつつ、過去の言説が現実的な知覚を組み立てることができるのは、「それが、読む者の要求や願望の縁取りをはっきりさせるからにすぎない」とジョイスは主張するのである。[10]

ジョイスの著書が示す通り、歴史家の声は重要であるが、歴史家が伝えようとしている過去の声も劣らず重要なのである。キース・ジェンキンズが指摘するように、たいていの生徒や学生は、二次文献だけを読んで歴史を学んでいるというのは正しい。[11] しかし、これは歴史的知識の性質に関する議論とは、あまり関係がない。歴史的知識とは、まず第一に過去が残していった痕跡から過去を再構築することがどの程度可能か、ということと関係している。つまり、一次史料に依拠した歴史研究と関係しているのだ。確かにわれわれが二次史料を読むときに踏む手順は、一次文献を読むときの手順とほとんど同じである。われわれはその文献を誰が、なぜ、誰に向けて書いたのかを問う。われわれは内的一貫性や同じ主題に関する他の文献との一貫性を調べ、もしもそれが他の史料に由来する情報を含んでいれば、この情報はどこから来たものなのかを問い、それを調べることにも全力を尽くす。しかしだからといって、こうした同じ手順で取り扱う対象（一次文献と二次文献）が同一の意味をもつはずだということにはならない。

過去を「テクスト」と呼ぶことはもちろん比喩的表現であって、説明を試みているのではない。[12] 過去は単なるテクスト以上のものであり、それをテクストとして呼んでみても、現実のほんの小さな一部分しかとらえられない。社会的、政治的な出来事は、文学テクストと同じものではない。ゲイブリエル・スピーゲルは次のように主張する。「歴史家なら誰ひとりとして、たとえ実証主義的な立場に立つ者であっても、歴史がテクスト以外の形をとって存在するという人はいないだろう」。[13] 彼女はまた、別の箇所で「歴史文献の文学的な性質」[14]について言及している。しかし、史料は文学テクストと同じではない。史料は必ずしも出来事や心理状態や物語に関する記述であるとは限らない。モムゼンのローマ時代の碑文の利用からランケ派の外交文書の分析にいたるまで、教区の出生・結婚・死亡の記録の山をかき分ける計量史家から中世史家たちの土地制度、建築物、考古学的遺物の調査にいたるまで、どの場合をとっても、史料それ自体が直接物語るということはない。つい近年の出来事に

リチャード・J. エヴァンズ

歴史学の擁護

ポストモダニズムとの対話

今関 恒夫・林 以知郎　監訳

佐々木 龍馬・與田 純　訳

晃洋書房